

対口・対日認識の決定要因を探る

——〈アジア・バロメーター〉2008年調査を用いて——

笹 岡 伸 矢

はじめに

日本にとって「近くて遠い国」としてのロシア、首都モスクワからみると東のはずれにある日本。しかし北海道本島から歯舞群島の貝殻島まではわずか3.7 km、宗谷岬からサハリンでも43 kmしかないにもかかわらず（領土問題があり日本政府の公式見解からは未確定と考えることもできるが）、日本に最も近い隣国がロシアだという事実を知らない人も多い。日ロ両国ともに物理的距離の近さにもかかわらず、相手国が身近に感じられていないように思える。両国ともに相手国はまさに「遠い隣国」である（木村2002）。

実際の世論調査では、日本人がロシアに対してよい印象を抱いておらず、総じて無関心である一方、ロシア人は好きか嫌いかで言えば、日本のことが好きであることが示されている。では、このような意識の違いを形成する要因は何なのであろうか。本稿ではこの問いに答えたいと思う。よって、本稿の目的は「日本人の対口認識に影響を与える要因は何か」、「ロシア人の対日認識に影響を与える要因は何か」を探ることである¹⁾。より詳細に論じると「相手国が自国に与える影響の良し悪し」と「相手国に関心があるか否か」を調べることとなる。また、既存の研究では心理学的変数や社会的変数が主に取り上げられてきたが、本稿では特に、政治的変数がど

1) 日本に中国人、韓国・朝鮮人が住み、ロシアにはタタール人やチェチェン人など多数の民族が住んでいることを理解しているが、本稿では、便宜的に、日本の回答者を「日本人」、ロシアの回答者を「ロシア人」と呼称する。

のような影響を与えているのかを確認することに重きを置くこととする。

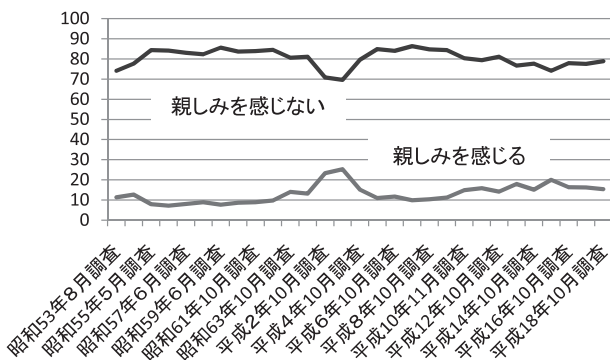
以下、まず日本人の対口認識とロシア人の対日認識、さらには類似の問題を扱った先行研究について触れ、本稿の意義を論じる。そして、検証する従属変数を設定し、先行研究から重要とされる仮説を提示する。分析は、日本とロシアの双方で同じ質問票を用いて実施された「アジア・バロメーター」2008年調査²⁾を用いる。最後にその分析結果を提示し、その含意について解釈を試みる。

1. 研究の動向

(1) 一般的傾向：日本人の対口認識・ロシア人の対日認識

まず、日本人の対口認識およびロシア人の対日認識がどのような傾向にあるのかを確認しておきたい。外務省世論調査(図1, 2)が、日本人の対口認識に関する調査を一貫して続けており、時系列的に日本人のロシア

図1 外務省による世論調査「ロシアに対する親近感」(%)

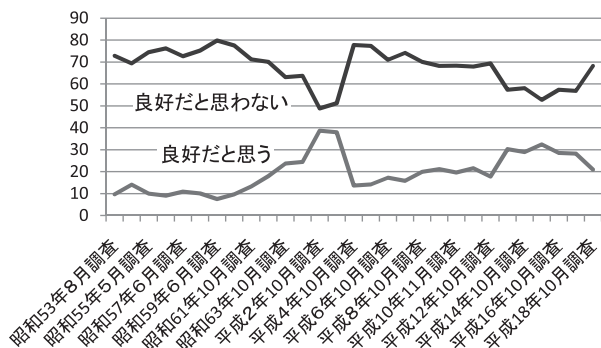


出所：外務省 HP「外交に関する世論調査」

<http://www8.cao.go.jp/survey/h20/h20-gaiko/2-1.html>

2) <アジア・バロメーター>2008年調査の未公開データを使用させていただいたことに関して、猪口孝・新潟県立大学学長に感謝したい。その<アジア・バロメーター>の目的やこれまでの経緯については猪口、藤井 2008を参照のこと。当調査に関する情報は以下の HP で確認できる。<https://www.asiabarometer.org/>

図2 外務省による世論調査「現在の日本とロシアの関係」(%)



出所：外務省 HP「外交に関する世論調査」,
<http://www8.cao.go.jp/survey/h20/h20-gaiko/2-1.html>

観を知ることができる。この調査から明らかなのは、日本人はロシアに対して負のイメージがあるという事実である。それに対して、ロシア人の対日認識に関する調査は体系立ったものを見つけられなかった。それでもいくつかは存在している。日本の外務省がおこなった世論調査（表1）ではロシア人は日本に対して好意的であることが示されている。また、全ロシア世論調査センター（VTsIOM）（表2）の調査では、ロシア人が経済的な関係を重視していることが明らかとなる。

これらの調査が有する意義は大きく、特に時系列で示されている調査は貴重であり、対外国認識の動態を探るうえでは重要な情報である。ただし、いずれも個票データが公開されておらず、それらデータで計量分析をおこなっているわけでもないため、なぜ個人がそのように考えに至るのかを決定する要因を明らかにするものではない。

(2) 先行研究

先行研究であるが、日本人の対ロシア人観に触れた論文としては小林（2007, 2008）があげられる。彼の議論では特に、北海道の諸都市における市民がロシア人船員に対して抱く意識が中心に取り上げられている。それ

表1 日本・外務省「ロシアにおける対日世論調査」(%)

a

	日本に	
	関心あり	全く関心なし
平成13年	48	27
平成17年	40	40

b

	日本が ^a			
	好 き	部分的に好きで部分的に嫌い	嫌 い	関心なし
平成13年	45	24	2	24
平成17年	37	24	3	30

c

	日本との友好関係が ^a	
	重 要	重要でない
平成13年	94	2
平成17年	89	4

d

	現在の日ロ関係は		
	良 好	悪 い	わからない
平成13年	61	11	28
平成17年	63	8	29

出所：外務省 HP 「外交に関する世論調査」.

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/russia/yoron05/index.html>

表2 全ロシア世論調査センターの調査(2005年10月)(%)

ロシアにとって日本は	
貿易・経済的パートナー	50
経済的・政治的ライバル・競争相手	12
友好国家	10
戦略的パートナー	6
潜在的敵国	6
回答困難	16

出所：ВЦИОМ HP.

http://wciom.ru/arkhiv/tematicheskii-arkhiv/item/single/2014.html?no_cache=1&cHash=af21af80ff

に対し、本稿では対象を日本国内に設定し、ロシアにも同様の枠組みを当てはめて比較することに重きを置き、そして計量分析を用いて規定要因を解明するという点で研究の目的が異なっている。また、ロシア人の意識に関しては横手・上野編（2008）や五十嵐（1998）、ロシエコワ（2006）、ブラ斯拉ベッツら（2006）などがあげられる。ただし、いずれも本稿と同じテーマで分析を試みた研究ではない。

次に、外国および外国人に対する市民の認識を決定する要因についての研究がある（松本 2004；大槻 2006；濱田 2008；Nukaga 2006；Sigelman and Welch 1993；渡辺 2006）。この種の研究で多いのが、当該国内の外国籍者や移民・外国人労働者に対する（差別）感情の研究であり、本稿の目的とやや意味合いは異なるが、外国に対する認識という点では重なるので取り上げる。むしろ、これらの研究はもっとも身近な「外国（人）」に対する意識を対象としており、その身近な外国人と彼らの出身国の評価は少なくとも直結している部分が多いはずである。ゆえに、それらの研究から導かれた仮説を応用することは可能であると考ええる。また、それらの既存の先行研究は社会学や心理学の分野での業績が中心で、社会学的・心理学的変数を用いた分析が多かった。そのため、政治学的に重要な変数が中心を占めてこなかったともいえる。

先行研究から明らかとなる問題は以下の3点である。(1) 日本人の対ロ認識、ロシア人の対日認識について世論調査を用いて体系的に計量分析をおこなった研究は少ない。(2) 対外国意識の計量分析でも、政治的変数を入れて分析した研究はほとんどない。(3) 国を超えて同じモデルで分析した研究は日本人の外国意識研究では少ない。よって、本稿では以下の点で新たな視点を提供しようとする。(1) 日本人の対ロ認識、ロシア人の対日認識について、世論調査を用いて政治的変数の影響力を見るという点、そして、(2) 両国をほぼ同じモデルを用いて分析する点、である。

以下、日本とロシア以外の国の人が他の国ないし他の国の人々に対して抱く認識の形成要因を探る研究から仮説を抽出することとする。

2. 要因の整理

以下、重複する部分が多いものの、諸要因を便宜上、政治と社会・心理という2つの軸に分けて、みていきたい。

(1) 政治に関する仮説

a. イデオロギー・党派性仮説

冷戦時代、日本国内でも左右の対立が存在し、「保革イデオロギー」が政治的亀裂となっており（河野 2001：12）、現在においても、各人の有するイデオロギーや党派性が対外国認識を形成する要因となる可能性は存在する。具体的には、（次の仮説ともつながるが）右派は愛国的で、左派は国際的だと考えられる。ただし、左派陣営のなかでも党派対立があることを踏まえると、特に日本の文脈では、左派に反ソ（その後反口）的な人も多いと考えられ、逆の仮説も想定できる。

また、対外国認識においては、三宅一郎の言葉を借りれば、「対外国好き嫌いの感情は個人の党派的立場と関連するのは当然である。アメリカ好きの人にとって「自由陣営」に属する国はどの国でも多かれ少なかれ好きであり、「共産陣営」に属する国々は嫌いだという傾向が強いだらう」（三宅 1997：42）。しかし、冷戦が終結した現在、この議論は当てはまらないのではないかという指摘もありうる。ただし、東アジアでは、冷戦構造が残存しているという解釈も可能であり（李 1996）、米国を後ろ盾にしてつながる自由主義ブロックと、旧ソ連・中国を中心とする（旧）共産主義ブロックとのあいだでいまなお色分けがなされているため、この枠組みは維持できると考える。

b. ナショナリズム仮説

愛国的・保守的傾向の人間ほど、その国ないしその居住地域に固有のアイデンティティを脅かすような国および外国人に対しては反感を抱くことが明らかとなっている（Semyonov, Rajjman and Gorodzeisky 2006：444；

班 2005)。ただし、人が自国を誇りに思うことと他国を批判することとは必ずしも直結するわけでもなく、愛国者がすなわち排外主義的なナショナリストになるわけではない。

また、他国から守るべきものが自国の文化・習慣だけにとどまらず、自国の領土・国民にまで広がるとき、軍事力を用いて侵略勢力を排除し、場合によっては先制的に他国を侵略していく必要性が生まれるという考えに至る人もいるかもしれない。愛国的な人が軍事力で祖国を守ることを大事だと考えたとすれば、そのような人が排外的な感情を持つかもしれない。

c. 世代仮説

日本とロシアの文脈では、古い世代ほど戦争・冷戦などの影響で両国ともに負のイメージを持つかもしれないが、関心は高いかもしれない (Isernia 2007; 濱田 2008; 三宅 1997)。年齢そのものの効果としては、若い人ほど寛容度が高い傾向が示されており (松本 2004)、過去の記憶の効果だけでなく、一般的傾向でもある。ちなみに、田辺 (2008: 379) では日本人のロシアに対する意識を決定づけているのは、学歴や外国人の友人の有無という変数ではなく、おおむね年齢の差であるとしている³⁾。

(2) 社会・文化に関する仮説

a. 居住地仮説

人はどこに住んでいるかによって意見を大きく変える。特に、人やモノの交流の多い国境地域 (ロシエコワ 2006) や、過去に相手国と何らかの出来事を経験した地域 (Carson and Nelson 2008) においては、相手国に対して関心が高まるはずである。在日外国人に対する意識の研究などでは、この仮説は当該地域の外国人労働者の多寡が説明変数となる場合が多い (鐘ヶ江 2001)。好悪の感情についてはおそらく両面存在するといえ、ど

3) 米国人の対ロシア意識も世代の効果があると考えられる (Rukavashnikov, 2004: 26)。

ちらとはいえない。

b. 外国人接触仮説

外国人との接触が多いと対外国（人）認識が好転するという研究結果を示した論考は前述のとおり、数多い。自分たちといくぶん違った容姿、言語、文化を持つ人々との接触を通じて、彼らに対する悪感情は緩和されるとする⁴⁾。

c. 脅威仮説

外国人労働者や移民の増加はその国の市民の雇用に影響を与える可能性がある。特に、言語的に習熟していない外国人に対して雇用機会が開かれている分野が肉体労働に多いことを考えると、彼らと現地のブルーカラー層との競合は避けられない。要するに、自分たちの社会経済的地位が脅かされるという「脅威」を抱いた結果、排外的になるという傾向が存在する(Nukaga 2006；永吉 2008；濱田 2008)。

d. 国際化仮説

外国に対する認識は、イデオロギーや党派性を絡めて理解するよりも、人々の態度が外国そのものに開かれているか否かで考える方がよいかもされない。つまり、個別の国ごとに態度が決定的に異なるというよりは、国際化のなかで個々人が外国全般に対して好感を抱いているか否か、関心を有しているか否かで考えるということである。文脈は異なるが、国際化が外国人労働者受け入れに対する意識を形成するという議論もある(鐘ヶ江 2001)。

e. メディア接触仮説

相手国に対するニュースに触れる機会が多ければ、その国に対して知る

4) 結果に影響を与える条件がいくつか存在している。例えば、彼ら外国人がどの国出身でどの民族なのか(大槻 2009；寺島, 本田 2009；田辺 2008)、接触の頻度は濃いのか淡いか(大槻 2006)といった要素も意識の形成にとって重要である。しかし、本稿では、用いる世論調査にそれを説明できる質問項目がないため、参考にとどめる。

ことが増え、相手の印象は良く（悪く）なるかもしれないし、関心も高まるかもしれない（田辺 2008；萩原 2007；伊藤・朱 2008；河野 2008a, 2008b）。そのうえで、報道の内容が重要となる。メディアがその国に対して良い報道をしているのか、それとも悪い報道をしているのかで、受け手の印象は大きく変わるからである。さらに好悪の感情だけでなく、メディアの「培養理論」で述べられるように、不偏不党を是とするマスコミに触れていると意見が中道化していくという考えもある（蒲島・竹下・芹川 2007, 110-1）。

f. 文化的愛着度仮説

相手国の文化に触れている人ほど、その国に関心を持ち、良い影響があると考えるかもしれない（寺島、本田 2009；湊 2009）。外国の映画やテレビ番組、小説などに触れていれば、その国に対する印象が形成され、良い印象を持つかもしれない。これは、いわゆる「ソフト・パワー」（ナイ 2005）や、「パブリック・ディプロマシー」（金子ら編 2007；井上 2008）の議論で想定されているものであるといえる。ロシアにおいても、近年日本のポップカルチャーの世界的浸透についても議論されており、これはこの国での日本への関心の高まりを示している一例であろう（Katasonova 2009）。

g. 教育水準仮説

教育水準が高いと外国人に対して寛容になるという議論がある（Nukaga 2006；濱田 2008；鐘ヶ江 2001）。さらに、教育を受ける期間が長いと相手国に対する認識が増し、関心が高まるかもしれない。

3. 仮 説

(1) 従属変数の設定

本稿では対日・対口認識の決定要因を考察するが、回答者の外国に対する「良い影響－悪い影響（従属変数1）」の感情だけでなく、同様に「関心－無関心（従属変数2）」の違いも重要であると考えられる。

(2) 仮 説

以下、重要な要因について仮説を設定する。仮説1は従属変数1、つまり相手国が自国に良い影響を与えているか否かを説明するものであり、仮説2は従属変数2、つまり相手国に対して自分が関心を抱いているか否かを説明するものである。

a. 左右イデオロギー

仮説1-1 自らを右派と規定する人は相手国から悪い影響を受けると考えるかもしれない

仮説1-2 自らを左派と規定する人は相手国から良い影響を受けると考えるかもしれない

仮説1-3 反対に、自らを左派と規定する人は、相手国から悪い影響を受けると考えるかもしれない

仮説1-4 日本と米国が同盟国であり、ロシアと中国が同盟国であるという理由から、日本人の対米認識は対米認識と負の関係があり、対中認識と正の関係があるかもしれない。他方、ロシア人の対日認識は対米認識と正の関係があり、対中認識と負の関係があるかもしれない

b. ナショナリズム仮説

仮説1-5 自国に誇りを持つ人ほど相手国に悪い印象を持つかもしれない

仮説1-6 自国の軍隊（自衛隊）への信頼が高い人ほど相手国に悪い印象を持つかもしれない

仮説1-7 軍事費の増強を望む人ほど相手国に悪い印象を持つかもしれない

c. 世代仮説

仮説1-8 古い世代ほど相手国に負のイメージを持つかもしれない

仮説2-1 古い世代ほど関心は高いかもしれない

d. 居住地仮説

仮説1-9 北海道居住者（日本）⁵⁾・極東居住者（ロシア）は戦争・冷戦の記憶が色濃く残っているか、外国人居住者・労働者・船員・旅行者などとの文化摩擦があれば日本・ロシアに対する印象は悪いかもしれない

仮説1-10 北海道居住者（日本）・極東居住者（ロシア）は経済交流や人的交流の増加により、日本・ロシアに対する印象は良いかもしれない

仮説2-2 北海道居住者（日本）・極東居住者（ロシア）は、地理的近接性から他の地域よりも交流の度合いは高いため、関心が高いかもしれない

e. 外国人接触仮説

仮説1-11 外国人との接触回数が多いと外国に対する印象は良いかもしれない

仮説2-3 外国人との接触回数が多いと外国に対する関心は高まるかもしれない

f. 脅威仮説

仮説1-12 外国人労働者の流入の規制を求める人は外国に対して悪い印象を抱いているかもしれない

g. 国際化仮説

仮説1-13 外国に家族・親戚がいると、外国に良い印象をもつかもしれない

仮説2-4 外国に家族・親戚がいると、外国に対して関心は高いかもしれない

仮説1-14 日本人もロシア人も国を問わず、外国それ自体に対して一貫して良い（もしくは悪い）影響があると考えているかもしれない⁶⁾

5) ここでは「北海道／東北」ではなく、「北海道」居住者のみを取り上げている。

6) この仮説1-14は、仮説1-4と同じ変数で検証をおこなう。

仮説2-5 日本人もロシア人も、国を問わず、外国それ自体に対して無関心であれば、同様に相手国に対しても無関心かもしれない

h. メディア接触仮説⁷⁾

仮説1-15 メディアに触れている人ほど相手国に対して良い印象を持つかもしれない

仮説1-16 反対に、メディアに触れている人ほど相手国に対して悪い印象を持つかもしれない

仮説2-6 相手国に関する報道に触れている人ほど、その国に関心を抱くかもしれない

i. 文化的愛着度仮説

仮説1-17 相手国の文化に多く触れている人ほど相手国に対して良い印象を持つかもしれない

仮説2-7 相手国の文化に多く触れている人ほど、その国に関心を抱くかもしれない

j. 教育水準仮説

仮説1-18 学歴が高い人ほど相手国に対して良い印象を持つかもしれない

仮説2-8 学歴が高い人ほど相手国に対する関心は高いかもしれない

4. 分 析

(1) 調査概要と基本統計量

分析のために用いるデータは「アジア・バロメーター」2008年調査である。調査概要は表3で示した。

7) 以下の分析ではメディアの代表としてテレビと新聞を選択した。その理由は、今回の「アジア・バロメーター」調査において、両国ともこの2つのメディアからの影響が突出して高い結果が出ていたことによる。また、この事実は、日本に関しては、新聞通信調査会 HP で、ロシアに関しては、Pietiläinen 2008でも確認される。

笹岡：対ロ・対日認識の決定要因を探る

表3 調査概要

	日 本	ロ シ ア		
使用データ	「アジア・バロメーター」2008年調査			
調 査	層化多段無作為抽出法			
標 本 数	1,012 (男448, 女564)	1,055 (男488, 女567)		
年 齢	20歳－69歳			
	20－29	120	20－29	233
	30－39	185	30－39	210
	40－49	196	40－49	245
	50－59	264	50－59	191
	60－69	247	60－69	176
	地 域	北海道／東北	130	北部・北西部
関 東		270	中央部	242
中 部		202	ヴォルガヴァトカ	51
近 畿		162	中央黒土	53
中国／四国		125	ヴォルガ	118
九 州		123	ウラル	133
			北カフカス	136
			西シベリア	102
			東シベリア	54
			極 東	55

(2) 従属変数とモデル

仮説1と仮説2で従属変数は異なるが、同じ質問を用いる。その内容は「あなたは、次の国や地域が日本（ロシア）に良い影響を与えていると思いますか、悪い影響を与えていると思いますか」（問28）というものである。この問いへの回答から操作化をおこなう。

まず、仮説1の従属変数は、相手国の影響が良いか悪いかであり、本来5分法であったところを、「非常に良い」と「良い」を「良い」とし、「非常に悪い」と「悪い」を「悪い」とし、「どちらでもない」とあわせて3値とした。

他方、仮説2の無関心か否かに関しては、「どちらでもない」と「わからない」を「無関心」という1つのカテゴリーとし、それ以外を「関心（あ

り)」として操作化した。その理由は、「アジア・バロメーター」2008年調査では、日本の回答者の6割が、ロシアが日本に与える影響は良くも悪くもなく「どちらでもない」としているからである。ただし、「どちらでもない」という回答が無関心を指しているとは必ずしも言えないことを考えると、あくまで1つの目安と考えておきたい。

おこなう分析の従属変数は以下の4つである。

J-1 日本人が考えるロシアが日本に及ぼす影響（3値：良い－どちらでもない－悪い）

J-2 日本人がロシアに無関心か否か（2値：関心－無関心）

R-1 ロシア人が考える日本がロシアに及ぼす影響（3値：良い－どちらでもない－悪い）

R-2 ロシア人が日本に無関心か否か（2値：関心－無関心）

このうち、仮説1（J-1とR-1）の従属変数は順序変数なので順序ロジスティック回帰分析を、仮説2（J-2とR-2）の従属変数は2値なのでロジスティック回帰分析をそれぞれ用いる。また、制御変数として「性別」と「生活水準」を投入した。

以上の定義を踏まえ、使用した質問と変数の組換については表4を、基本統計量は表5を参照していただきたい。

(3) 結果の解釈

回帰分析の結果は表6を参照していただきたい。では、各結果について解釈を施していこう。

a. モデルJ-1：日本人の反口感情

政治学的変数については、「左派」が10%水準で有意かつ正の相関であった。これは仮説1-2ではなく仮説1-3を証明している。自らを左派と自己規定する人は昔ながらの反ソイメージ、もしくは強力な資源外交を展開し、独裁化を強めるロシアに悪感情を抱き、ロシアに対する抵抗感を有したと推測される。

また「対中認識」と「対米認識」が0.1%水準で有意になり、ともに正の相関があった。これは仮説1-4ではなく仮説1-14を証明しているといえる。つまり、日本人の中国・米国に対する反応が、ロシアに対する反応と連動していることが明らかになる。

そして「年齢」が0.1%水準で有意かつ正の相関であり、年齢が高いほどロシアに悪感情を抱いていることが分かる（仮説1-8）。戦争・冷戦の印象は強く残っているようだ。また、「教育水準」が10%水準で正の関係にあり、これは教育程度が高い人ほど反口的になることを示しており、仮説とは反対の結果が出た。

b. モデルJ-2：日本人の対中無関心

「対中無関心」と「対米無関心」が0.1%水準で有意かつ正の相関であった（仮説2-5）。これは日本人が外国全般に対して興味がある人とならないにわかれていることを示している。また「年齢」が1%水準で有意かつ負の相関であり、年齢が高い人ほどロシアに無関心であることが分かる（仮説2-1）。そして「テレビ視聴」が10%水準で有意かつ正の相関になったが、日本ではテレビ報道に触れている人ほど、ロシアに無関心もしくは中立的になっているということを示している（仮説2-6）。これは、マスコミがあまりロシアについて報道しておらず、取り上げても偏った報道をそれほどしていないという解釈が可能かもしれない。

c. モデルR-1：ロシア人の反日感情

日本同様、「対中認識」と「対米認識」が0.1%水準で有意になり、ともに正の相関があった。これは仮説1-14を証明している。つまり、ロシア人も中国・米国に対して、日本に対する反応と同じ傾向を示していることを表している。

次に「テレビ視聴」が1%水準で有意であり、これが負の相関であることを考えると、テレビをよく見るロシア人は日本に対して好意的印象を抱くということになる。ロシアでは日本に関する報道は好意的なものが多いのかもしれない（仮説1-15）。また「教育水準」が1%水準で有意かつ負

表4 質問

変数	質問	尺度
イデオロギー		1-10, 99
右派	問55 政治の話をする時、「右寄り」、「左寄り」ということが言われますが、一般的に考えて、あなたのご意見は、1~10のうち、どこに位置すると思われますか。(1つずつ)	
左派		
中道		
イデオロギー不明		
対中認識	問28 あなたは、次の国や地域が日本(ロシア)に良い影響を与えていると思いますか、悪い影響を与えていると思いますか。それぞれの国についてお答えください。(中国)	1-5
対中無関心		1-5, 99
対米認識	問28 あなたは、次の国や地域が日本(ロシア)に良い影響を与えていると思いますか、悪い影響を与えていると思いますか。それぞれの国についてお答えください。(アメリカ)	1-5
対米無関心		1-5, 99
愛国心	問19 日本人(ロシア人)であることを、あなたはどの程度誇りに思いますか。	1-5
軍(自衛隊)への信頼	問31 あなたは、ここにあげる組織や制度が、社会のためになるという点で、どの程度信頼できますか。	1-5
防衛費・軍事費	問34 政府が支出するさまざまな領域があります。それぞれの領域について、どの程度、政府支出を増やす方がよい、または、減らした方がよいと思いますか。(軍事・防衛)	1-5
年齢	F 2 あなたは、満で何歳ですか	20-69
北海道	居住地(日本のみ)	
極東	居住地(ロシアのみ)	
外国人知人	問3 この中で、あなたにあってはまるものがありましたら、いくつでもお答えください。	0-1
外国人労働者規制	問38a 政府は国民の利益を守るために外国人労働者が入ってくるのを制限するべきだ	1-5
外国在住家族	問3 この中で、あなたにあってはまるものがありましたら、いくつでもお答えください。	0-1
テレビ視聴	問37 社会や政治に関する問題についての自分の意見をまとめる時、次のメディアのうち、あなたの意見に最も影響を与えるのはどれですか。(テレビ番組)	0-1
新聞閲読	問37 社会や政治に関する問題についての自分の意見をまとめる時、次のメディアのうち、あなたの意見に最も影響を与えるのはどれですか。(新聞記事)	0-1
日本テレビ・映画・アニメ	問4 次の各国で制作されたテレビ番組、映画やアニメーションを、どのくらいの頻度でご覧になりますか。(日本)	1-6
ロシアテレビ・映画・アニメ	問4 次の各国で制作されたテレビ番組、映画やアニメーションを、どのくらいの頻度でご覧になりますか。(ロシア)	1-6
教育水準	F 3 あなたの最終学歴を教えてください。	(日)2-5, (ロ)1-7
性別	F 1 あなたの性別を教えてください。	1-2
生活水準	問9 あなたの生活水準は、この中のどれにあたると思いますか。	1-5
対日・対口認識	問28 あなたは、次の国や地域が日本(ロシア)に良い影響を与えていると思いますか、悪い影響を与えていると思いますか。それぞれの国についてお答えください。(日本・ロシア)	1-5
対日・対口無関心		1-5, 99

笹岡：対口・対日認識の決定要因を探る

と 変 数

内 容	統合, 組換	変 更 後 尺 度
左-右		
	8-10	右派以外(0)-右派(1)
	1-3	左派以外(0)-左派(1)
	4-7	中道以外(0)-中道(1)
	99	イデオロギー自覚(0)-イデオロギー不明(1)
非常によい影響-非常に悪い影響	1+2, 3, 4+5	良い影響(1)-どちらでもない(2)-悪い影響(3)
無関心-関心	1+2+4+6, 3+99	関心(0)-無関心(1)
非常によい影響-非常に悪い影響	1+2, 3, 4+5	良い影響(1)-どちらでもない(2)-悪い影響(3)
無関心-関心	1+2+4+6, 3+99	関心(0)-無関心(1)
誇りに思う-全く誇りに思わない	1-2	誇りに思わない(0)-誇りに思う(1)
非常に信頼している-まったく信頼していない, あまり考えたことがない	1+2, 3+4	信頼していない(0)-信頼している(1)
支出を大きく増やすべき-支出を大きく減らすべき	1+2, 3, 4+5	増やすべき(1)-どちらでもない(2)-減らすべき(3)
		20-69
		北海道以外居住(0)-北海道居住(1)
		極東以外居住(0)-極東居住(1)
外国人の友人が国内にいる-いない		外国人の友人が国内にいない(0)-いる(1)
強く賛成-強く反対	1+2, 3, 4+5	賛成(1)-どちらでもない(2)-反対(3)
外国に住む家族や親戚なし-あり		外国に住む家族や親戚なし(0)-あり(1)
テレビ番組の影響なし-あり		テレビの影響なし(0)-影響あり(1)
新聞の影響なし-あり		新聞の影響なし(0)-影響あり(1)
ほぼ毎日-まったく見ない		ほぼ毎日(1)-1週間に数回(2)-1カ月に数回(3)-1年に数回(4)-ほとんど見ない(5)-全く見ない(6)
ほぼ毎日-まったく見ない		ほぼ毎日(1)-1週間に数回(2)-1カ月に数回(3)-1年に数回(4)-ほとんど見ない(5)-全く見ない(6)
(日本) 小学校・中学校・高等学校・高校レベルの専門学校, 短大・専門学校・高等専門学校, 大学・大学院 / (ロシア) 初等学校以下, 中等学校未滿, 中等学校卒業, 専門学校卒, 高等学校未修了, 高等学校卒, 大学卒以上		(日)低(2)-高(5), (ロ)低(1)-高(7)
男性-女性		男(1)-女(2)
高い-低い	1+2, 3, 4+5	高(1)-中(2)-低(3)
非常によい影響-非常に悪い影響	1+2, 3, 4+5	良い影響(1)-どちらでもない(2)-悪い影響(3)
無関心-関心	1+2+4+6, 3+99	関心(0)-無関心(1)

表5 基本統計量

	日 本					ロ シ ア				
	観察数	平均	標準偏差	最小	最大	観察数	平均	標準偏差	最小	最大
右派	1,012	.054	.227	0	1	1,055	.136	.342	0	1
左派	1,012	.088	.283	0	1	1,055	.363	.481	0	1
中道	1,012	.693	.462	0	1	1,055	.088	.284	0	1
イデオロギー不明	1,012	.165	.371	0	1	1,055	.413	.493	0	1
対中認識	980	2.459	.670	1	3	873	1.991	.787	1	3
対米認識	971	2.039	.731	1	3	915	2.525	.747	1	3
愛国心	1,012	.835	.371	0	1	1,025	.830	.376	1	3
軍への信頼	950	.615	.487	0	1	995	.562	.496	0	1
軍事費	970	2.320	.632	1	3	983	1.301	.546	1	3
年齢	1,012	47.842	13.640	20	69	1,055	43.229	14.174	20	69
北海道・極東	1,012	.042	.200	0	1	1,055	.052	.222	0	1
外国人知人	1,012	.121	.326	0	1	1,055	.055	.228	0	1
外国人労働者規制	997	1.815	.688	1	3	998	1.363	.628	1	3
外国在住家族	1,012	.125	.331	0	1	1,055	.070	.256	0	1
対中無関心	1,012	.362	.481	0	1	1,055	.488	.500	0	1
対米無関心	1,012	.486	.500	0	1	1,055	.278	.448	0	1
テレビ視聴	1,012	.891	.311	0	1	1,055	.896	.306	0	1
新聞閲読	1,012	.842	.365	0	1	1,055	.492	.500	0	1
相手国文化	996	5.688	.639	1	6	964	5.194	1.051	1	6
教育水準	1,012	3.619	1.069	2	5	1,055	3.284	1.164	2	5
性別	1,012	1.557	.497	1	2	1,055	1.537	.499	1	2
生活水準	1,007	2.024	.581	1	3	1,038	2.144	.639	1	3
対日・ロ影響	929	2.170	.503	1	3	859	1.668	.681	1	3
対日・ロ無関心	1,012	.741	.438	0	1	1,055	.533	.499	0	1

の相関であり、日本とは反対に、高学歴の人ほど日本を好意的に見ていることを示している（仮説1-18）。そして「生活水準」が1%水準で有意かつ正の相関である。これは自らの生活が良いと考えている人ほど日本の影響は良いと考えていることを示している。

d. モデルR-2：ロシア人の対日無関心

ここでは「極東」が1%水準で有意かつ負の相関であり、これは仮説2-

笹岡：対口・対日認識の決定要因を探る

表6 分析結果

	J-1	J-2	R-1	R-2
右派	.587 (.356)	-.737 (.332)*	.089 (.327)	-.117 (.326)
左派	.518 (.298)†	-.181 (.289)	.151 (.280)	.051 (.280)
イデオロギー不明	-.407 (.264)	.237 (.269)	.625 (.284)*	.306 (.285)
対中認識	1.048 (.140)***		1.053 (.118)***	
対米認識	.981 (.125)***		.436 (.114)***	
愛国心	-.176 (.226)	.165 (.225)	-.063 (.222)	.123 (.230)
軍への信頼	-.184 (.176)	.068 (.176)	.099 (.165)	-.047 (.165)
軍事費増強	.123 (.133)	.124 (.132)	.080 (.146)	.068 (.148)
年齢	.032 (.007)***	-.023 (.007)**	.000 (.006)	.002 (.006)
北海道	.242 (.379)	-.436 (.365)		
極東			-.214 (.399)	-1.190 (.436)**
外国人知人	-.274 (.258)	.107 (.263)	-.222 (.332)	.033 (.333)
外国人労働者規制	-.031 (.124)	-.161 (.120)	-.130 (.127)	-.053 (.127)
外国在住家族	-.229 (.263)	-.027 (.257)	.415 (.301)	.561 (.306)†
対中無関心		.191 (.189)***		.222 (.108)*
対米無関心		1.022 (.176)***		.100 (.111)
テレビ視聴	-.048 (.275)	.490 (.253)†	-.705 (.252)**	-.335 (.266)
新聞閲読	-.183 (.242)	.037 (.242)	.027 (.160)	-.323 (.162)*
相手国文化	.183 (.133)	.062 (.128)	.056 (.078)	.042 (.078)
教育水準	.164 (.094)†	-.028 (.092)	-.209 (.074)**	-.098 (.074)
性別	-.713 (.170)***	.509 (.168)**	.039 (.160)	-.006 (.160)
生活水準	-.025 (.146)	.064 (.144)	.373 (.138)**	.131 (.138)
第1閾値	2.807 (1.237)		2.868 (.808)	
第2閾値	7.926 (1.286)		5.509 (.832)	
定数		-.256 (1.168)		-.886 (.801)
観察数	841	899	675	696
疑似決定係数	.170	.112	.141	.037
対数尤度	-514.200	-460.342	-573.867	-460.607

(数値：左＝ロジスティック回帰係数、右(カッコ内)＝標準誤差)

***p<.001 **p<.01 *p<.05 †p<.1

※「イデオロギー」については「中道」を参照カテゴリーにした

2を証明している。極東居住者の日本への関心は高く、日本でそれに対応する「北海道」変数がなんら有意でないことを考えると、興味深い。同様に「新聞閲読」が5%水準で有意かつ負の相関であり、新聞をよく読む人ほど日本に関心を抱いていることが分かる(仮説2-6)。

「外国在住家族」が10%水準で有意かつ正の相関になった。これは外国に家族・親せきがいると日本に無関心・中立的になるということであり、日

表7 仮説の検証結果

		日本：ロシアの影響			ロシア：日本の影響		
		仮説	結果		仮説	結果	
		方向	方向	有意	方向	方向	有意
1-1	右派	+	○		+		
1-2	左派	-			-	○	
1-3	左派	+	○	†	+		
1-4	対中認識	-			+		
	対米認識	+			-		
1-5	愛国心	+			+		
1-6	軍への信頼	+			+	○	
1-7	軍事費	+	○		+	○	
1-8	世代	+	○	***	+	○	
1-9	北海道・極東	+	○		+		
1-10	北海道・極東	-			-	○	
1-11	外国人知人	-	○		-	○	
1-12	外国人労働者規制	-	○		-	○	
1-13	外国在住家族	-	○		-		
1-14	対中認識	+	○	***	+	○	***
	対米認識	+	○	***	+	○	***
1-15	テレビ視聴	-	○		-	○	**
	新聞閲読	-	○		-		
1-16	テレビ視聴	+			+		
	新聞閲読	+			+	○	
1-17	相手国文化	-			-		
1-18	学歴	-			-	○	**

		日本：ロシアへの関心			ロシア：日本への関心		
		仮説	結果		仮説	結果	
		方向	方向	有意	方向	方向	有意
2-1	世代	-	○	**	-		
2-2	北海道・極東	-	○		-	○	**
2-3	外国人知人	-	○		-		
2-4	外国在住家族	-	○		-		
2-5	対中	+	○	***	+	○	*
	対米	+	○	***	+	○	
2-6	テレビ視聴	-			-	○	
	新聞閲読	-			-	○	*
2-7	相手国文化	+	○		+	○	
2-8	学歴	-	○		-	○	

※+は正の相関、-は負の相関を示す。

※方向があていければ○。方向があていなければ空欄にした。

※仮説1は各独立変数の値が上昇すると日本（ロシア）が悪い影響を持つとするのが正の関係。負の関係はその逆。仮説2では、各独立変数の値が上昇すると日本（ロシア）への関心は低まるのが正の関係。負の関係はその逆。

※仮説1-4、1-14、2-5は2つの変数の方向がそろった場合、結果の方向と有意の項目を示している。

笹岡：対口・対日認識の決定要因を探る

本に対する評価を避ける傾向にあることを示している。

以上の仮説の検証結果は表7のようにまとめられる。

お わ り に

今回は対日・対口認識の決定要因を考察した。特に、回答者の外国に対する「良い影響－悪い影響」の感情に加えて、同様に「関心－無関心」の違いにも触れた。まず、政治学的変数については、全体ではそれほど強い効果を示していなかったが、世代とイデオロギーに関する仮説の一部が有意であった。

それぞれの結果について総じていえることは、まず日本人は外国に対して抱くもともとのイメージに加え、教育を受け、多くの情報を手にすればするほど、ロシアを含む外国に関心を抱き、評価を固めていくのだが、ロシアに対する評価は否定的な方向へと進む。また、年齢が高いほど悪感情を抱いているのに対して、冷戦後に成人した世代は関心を失っているようにみえる。しかし、90年代以降、対口感情は改善の兆しをみせているという指摘もあり（中村 2008a：172）、今後良い方向に進む可能性はある。

それに対し、ロシア人は地理的な要因から日本への関心を寄せるケースが多いという事実が浮かび上がった。さらに、ロシア人は元来有する外国全般に対するイメージと、テレビなどのマスコミの好意的報道から日本に対する認識を形成していると考えられる。高学歴の人、そして生活水準が良いと感じている人ほど日本に好印象を抱いているという点は、日本がロシアのどこに影響を与えるよう努力すべきかを示唆しているように思える。

近年叫ばれているパブリック・ディプロマシーの議論は多様であるが（三上 2007；井上 2008）、日本政府がもしロシアに対する草の根レベルでの友好政策をおこなう場合、極東を中心に、知識人・教養層への文化政策を実施するのがよいようにみえる。反対にロシア政府は、日本の若者層を中心に、まずは認知してもらうことから始め、非友好的なイメージの払しょくに取り組まなければならないだろう。両国ともに必要なことは、市

民の目をより外国に向けていくことのように思える。

今回は多国間比較をおこなうために作られた世論調査の〈アジア・バロメーター〉を使用しており、この調査では日口関係に関わる設問は用意されていない。ゆえに今後は、日口両国のみを対象にした具体的な調査を実施し、より真に迫った分析をおこなうことが求められよう。

＜参 考 文 献＞

- 五十嵐徳子『現代ロシア人の意識構造』大阪大学出版会、1998年。
- 伊藤陽一、河野武司編『ニュース報道と市民の対外国意識』慶應義塾大学出版会、2008年。
- 伊藤陽一、朱雅静「日本人の対中国態度と日本の新聞の中国報道」伊藤、河野編『ニュース報道と市民の対外国意識』2008年、3-26頁。
- 井上泰浩「パブリック・ディプロマシー、対外国意識、国際世論と外交政策」伊藤、河野編『ニュース報道と市民の対外国意識』2008年、265-284頁。
- 猪口 孝、藤井誠二「アジア・バロメーター調査 目的・射程・発展」高倉浩樹編『地域分析と技術移転の接点 「はまる」「みる」「うごかす」視点と地域理解（東北アジア研究シリーズ9）』東北大学東北アジア研究センター、2008年、65-101頁。
- 大槻茂実「外国人接触と外国人意識 JGSS-2003データによる接触仮説の再検討」大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編『日本版 General Social Surveys 研究論文集[5] JGSS で見た日本人の意識と行動』大阪商業大学比較地域研究所、2006年、149-160頁。
- 大槻茂実「「外国人」とは誰か 外国人増加意識における「外国人」カテゴリーの検討」『年報社会学論集』第22号、2009年、92-102頁。
- 鐘ヶ江晴彦「外国人労働者をめぐる住民意識の現状とその規定要因」鐘ヶ江晴彦編『外国人労働者の人権と地域社会 日本の現状と市民の意識・活動』明石書店、2001年、18-80頁。
- 金子将史、北野充編『パブリック・ディプロマシー「世論の時代」の外交戦略』PHP研究所、2007年。
- 蒲島郁夫、竹下俊郎、芹川洋一『メディアと政治』有斐閣、2007年。
- 木村 汎『遠い隣国 ロシアと日本』世界思想社、2002年。
- 河野武司「テレビニュース番組における米国報道とその影響」伊藤、河野編『ニュース報道と市民の対外国意識』2008年(a)、67-86頁。
- 河野武司「テレビニュース番組における中国・韓国報道とその影響」伊藤、河野編

- 『ニュース報道と市民の対外意識』2008(b)年, 87-100頁。
- 河野 勝「本書の意義と目的」三宅一郎, 西澤由隆, 河野 勝『55年体制下の政治と経済 時事世論調査データの分析』木鐸社, 2001年, 11-21頁。
- 小林真生「対外国人意識改善に向けた行政施策の課題」『社会学評論』第58巻第2号, 2007年, 116-133頁。
- 小林真生「地方の港湾都市におけるロシア人船員に対する意識の特性 北海道稚内市の事例を中心にして」『アジア遊学』第117号, 2008年, 165-171頁。
- 田辺俊介「国別好感度から見る『日本人』の世界認知 JGSS 第一次予備調査を用いて」大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編『日本版 General Social Surveys 研究論文集[3] JGSS で見た日本人の意識と行動』東京大学社会科学研究所, 2004年(a), 199-213頁。
- 田辺俊介「「近い国・遠い国」多次元尺度構成法による世界認知構造の研究」『理論と方法』第19巻第2号, 2004年(b), 235-249頁。
- 田辺俊介「「日本人」の外国好感度とその構造の実証的検討 亜細亜主義・東西冷戦・グローバリゼーション」『社会学評論』第59巻第2号, 2008年, 369-387頁。
- 寺島拓幸, 本田量久「グローバル化する消費嗜好と外国人に対する意識」『応用社会学研究』第51号, 立教大学社会学部, 2009年, 157-166頁。
- ナイ, ジョセフ(山岡洋一訳)『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』日本経済新聞社, 2005年。
- 中村悦大「対外国意識指標作成の試み(1)」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編』第24号, 2008(a)年, 163-183頁。
- 中村悦大「対外国意識指標作成の試み(2)」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編』第25号, 2008(b)年, 55-68頁。
- 永吉希久子「排外意識に対する接触と脅威認知の効果 JGSS-2003の分析から」大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編『日本版 General Social Surveys 研究論文集[7] JGSS で見た日本人の意識と行動』大阪商業大学比較地域研究所, 2008年, 259-270頁。
- 萩原 滋「大学生のメディア利用と外国意識 首都圏13大学での調査結果の報告」『メディア・コミュニケーション 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』第57号, 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所, 2007年, 5-33頁。
- 濱田国佑「外国人住民に対する日本人住民意識の変遷とその規定要因」『社会学評論』第59巻第1号, 2008年, 216-231頁。
- 班 偉「中国における「反日ナショナリズム」の論理と心理」『山陽論叢』第12号, 山陽学園大学, 2005年, 69-85頁。
- ブラ斯拉ベッツ, アンドレイ, レオニード・コズロフ, マリーナ・シチュペツニナ

- 「ロシア極東におけるロシア連邦の外交政策に関する世論 基礎的なパラメーター」『国際公共政策研究』第11巻第2号, 大阪大学大学院国際公共政策研究科, 2007年, 1-12頁。
- 堀内康史「異文化消費と外国人への態度 エスニックレストランの展開と地域社会」渡戸一郎, 川村千鶴子編『多文化教育を拓く マルチカルチュラルな日本の現実のなかで』明石書店, 2002年, 277-299頁。
- 松本 康「外国人と暮らす 外国人に対する地域社会の寛容度」松本 康編『東京で暮らす 都市社会構造と社会意識』東京都立大学出版会, 2004年, 197-219頁。
- 松本 康「地域社会における外国人への寛容度 隣人ネットワークが媒介する地域効果」広田康生, 町村敬志, 田嶋淳子, 渡戸一郎編『先端都市社会学の地平』ハーベスト社, 2006年, 8-32頁。
- 湊 邦生「JGSS-2006から見た日本におけるモンゴル国の好感度 東アジア各国・地域との比較検討」大阪商業大学 JGSS 研究センター編『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集[9]』大阪商業大学 JGSS 研究センター, 2009年, 139-156頁。
- 三上貴教「パブリック・ディプロマシー研究の射程」『修道法学』第29巻第2号, 2007年, 246-225頁。
- 三宅一郎「対外国態度と有権者の政治意識」『選挙研究』第12号, 1997年, 41-58頁。
- 三宅一郎, 西澤由隆, 河野勝『55年体制下の政治と経済 時事世論調査データの分析』木鐸社, 2001年。
- 山崎瑞紀「アジア系就学生の対日イメージ形成に関する因果モデルの検討」『教育心理学研究』第42巻第4号, 1994年, 442-447頁。
- 横手慎二, 上野俊彦編『ロシアの市民意識と政治』慶應義塾大学出版会, 2008年。
- 李鍾元『東アジア冷戦と韓米日関係』東京大学出版会, 1996年。
- ロシエコワ, オリガ「日本人とロシア人の行動パターンについての考察 ロシアの三地域(極東・シベリア・中部)におけるイメージを中心に」『国際開発研究フォーラム』第31号, 名古屋大学大学院国際開発研究科, 2006年, 211-231頁。
- 渡辺良智「日本人のアジア認識」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第14号, 2006年, 33-54頁。
- Carlson, Matthew, and Travis Nelson, “Anti-Americanism in Asia? Factors Shaping International Perceptions of American Influence,” *International Relations of the Asia-Pacific*, (Vol. 8, No. 3, September, 2008), pp. 303-324.
- Isernia, Pierangelo, “Anti-Americanism in Europe during the Cold War,” in Katzenstein and Keohane (eds.), *Anti-Americanisms in World Politics* (Ithaca: Cornell University Press, 2007), pp. 57-92.
- Katasonova, Elena Nikolaevna, “Iaponiia: Pop-diplomatiia i Pop-kul'tura (Japan: Pop-

- Diplomacy and Pop-Culture),” *Mirovaia Ekonomika i Mezhdunarodnye Otnosheniia* (*World Economics and International Relations*), (Vol. 2, 2009), pp. 56–63.
- Katzenstein, Peter J., and Robert O. Keohane (eds.), *Anti-Americanisms in World Politics* (Ithaca: Cornell University Press, 2007).
- Nacos, Brigitte L., Robert Y. Shapiro and Pierangelo Isernia, (eds.), *Decisionmaking in a Glass House: Mass Media, Public Opinion, and American and European Foreign Policy in the 21st Century* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 2000).
- Nukaga, Misako, “Xenophobia and the Effects of Education: Determinants of Japanese Attitudes toward Acceptance of Foreigners,” 大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編『日本版 General Social Surveys 研究論文集[5] JGSS で見た日本人の意識と行動』2006年, 191–202頁。
- Pietiläinen, Jukka, “Media Use in Putin’s Russia,” *Journal of Communist Studies and Transition Politics*, (Vol. 24, No. 3, 2008), pp. 365–385.
- Rukavashnikov, Vladimir Olegovich, “Otnoshenie Amerikanetsev k Sovremennoi Rossii (Americans’ Views on Contemporary Russia),” *Sotsiologicheskie Issledovaniia* (*Sociological Researches*), (Vol. 11, 2004), pp. 23–33.
- Semyonov, Moshe, Rebeca Raijman and Anastasia Gorodzeisky, “The Rise of Anti-Foreigner Sentiment in European Societies, 1988–2000,” *American Sociological Review*, (Vol. 71, No. 3, 2006), pp. 426–429.
- Siegelman, Lee, and Susan Welch, “The Contact Hypothesis Revisited: Black White Interaction and Positive Social Attitudes,” *Social Forces*, (Vol. 71, No. 3, 1993), pp. 781–795.
- 外務省 HP 「ロシアにおける対日世論調査」 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/russia/yoron05/index.html> (2009年9月30日確認)
- 外務省 HP 「外交に関する世論調査」 <http://www8.cao.go.jp/survey/h20/h20-gaiko/index.html> (2009年9月30日確認)
- 新聞通信調査会 HP 「メディアに関する全国世論調査」 <http://www.chosakai.gr.jp/notificat> (2009年9月30日確認)
- Vserossiiskii tsentr izucheniia obshchestvennogo mneniia (All-Russian Public Opinion Research Center) HP, <http://wciom.ru> (2009年9月30日確認)